

[論説・随筆]

## 地図旅行



大橋 秀雄\*

National GeographicとArizona Highways、この二つが毎月私の手元に届いてくる雑誌である。前者はアメリカ地理協会が発行するB5版約160ページの雑誌で、大は一国から小は一名所に至る世界様々な場所の景色や生活を美しいカラー写真をたっぷり使って紹介している。メイン記事の説明用に新聞見開きくらいの大型地図が入っていることが多い。時々最新の科学トピックス、例えば宇宙や新素材などの絵入り解説が取り上げられる。昔流に言えば地理歴史博物専科の雑誌で、年間購読料が送料込みで僅か30ドル。私は自分用のほかに二三の方にお歳暮代わりに贈呈している。

アリゾナハイウェイは、読んで字のごとくアリゾナ州の交通局が後ろだてとなって発行している観光促進誌である。A4版よりやや大きい約50ページの紙面が、徹頭徹尾アリゾナの自然を捉えたカラー写真で埋め尽くされている。アリゾナ州が対象では、すぐ種が尽きてしまうと私も考えたし、読者も思われるに違いないが、それが不思議と毎号新鮮な驚きを運んで来てくれる。アリゾナはアメリカではさして大きな州ではないが、それでも日本の $\frac{3}{4}$ 程はある。北はグランドキャニオンに代表される山岳森林地帯から、南は砂漠とサボテンの世界に至るまで、地形、植生とそこに棲む動物が四季様々にそのたたずまいを変える豊かな自然が横たわっている。この無名の雑誌は故兼重寛九郎先生が見つけられたものだが、大変お気に入り、私にもギフトとして予約して下さったのが縁となった。兼重先生の没後、どういふことかアリゾナ大学の友人が寄贈を始めてくれた。不思議と縁が続く雑誌である。ちなみに年間購読料は送料込みで20ドル弱である。

\*\*\*

\* 東京大学工学部  
原稿受付日 平成2年3月1日

アメリカに上陸すると必ず買うものがある。それはRand Mc. Nally社のRoad Atlasである。A3版130ページほどでアメリカとカナダの州別道路地図と主要都市や国立公園などの案内図が載っている。毎年版が改められ、新しい道路や公園が追加される。1965年に最初に購入したときは1ドル95セントだったものが、徐々に値上がりして最新の90年版は7ドル95セントになってしまった。それにしても内容の豊かさに比べて驚くほど安い値段である。道路地図には、この他アメリカ自動車協会AAA発行のもの(版や厚さはほぼ同じ、1ドル安い)など幾つかあるが、私は永年なじんできたマクナリー党である。

ヨーロッパは、国境、語境が入り組んでいるせいか、道路地図にもその国その国で沢山の種類があり、どれが良いか大いに迷うところである。マクナリー社もヨーロッパ版を出しているが、地元ではスイスのKümmerly & Frey社、イギリスのCollins社が頑張っている。国別地図ではHallwag社、市街図地では折り畳み方に特徴のあるFalk社のものが有名である。道路地図は、ガソリンスタンドやレンタカーのカウンターでもらうことが多いが、これらはほとんどBP、Aral、Shellなど石油系スポンサーの提供になるものである。何れも伝統があり、お金を払って地図を買うのが馬鹿らしくなるほど良くできている。

道路地図の他、ホテル、レストラン、名所旧跡のガイドブックの類も多い。タイヤメーカーのミシュランのものが昔から有名であるが、そのほかアラルを始めとする石油系もそれぞれに特色を競っている。

最近ホテルが国際的にチェーン化している。シェラトン、ヒルトン、ホリディイン、ベストウェスタンなどのホテル専門チェーンは勿論のこと、SAS、JALなど航空会社系ホテルチェーンの躍進も目ざましい。何れ

のチェーンもそれぞれにHotel Directoryを出しているが、これもまた見るだけで楽しいものである。ホテルの外観と室内の写真、設備案内と料金リスト、付近の空港からの地図、近所の名所案内と盛り沢山で、ページをめくる毎に旅心は一瞬にして世界のあちこちを駆け巡る。

1957年に初めて車を持って以来手に入れたこれらの地図やガイドブックのたぐいが何となく捨て難く、私の書棚を大きく塞ぐ結果となってしまった。

\*\*\*

昔から無趣味をかこっていた我が身に緑陰特集号からお呼びが掛かったのは、私がファミコンに凝っているという噂を信じた編集委員の一人が名指しをしたらしい。確かにファミコンは面白いが、本特集号を飾る格調高い趣味の中でファミコンとは余りにも情けない。あれこれ考えて思いついたのが地図旅行の特技である。

趣味と誇れるためには、楽しくてたまらないこと、ひとに自慢できること、本職とは無縁なことが必要だろう。私に楽しくてたまらないことは何かと問われれば、旅、それもハンドルを握って見知らぬ土地をさまよるのが最高と答えるだろう。旅への願望は強いが、金もなく暇もない凡人には単なる願望に終わるのが常である。地図はその願望を夢想に変えてくれる有難い道具である。

\*\*\*

知らない土地の地図を眺めてあれこれ想像を逞しくするのも、知った土地の地図を眺めて思い出を確かめるのも何れも楽しい。私はまだ南米にもアフリカにも行ったことがない。私の地図好きを知って見知らぬ土地の地図をお土産にもらうこともあるが、余りにも縁の薄いところだと想像力が一向に燃えて来ない。地図を眺めると次々に情景が浮かんでくるためには、一定の予備知識が必要なようである。従って私が好んで眺めるのは、日本は別とするとどうしてもアメリカとヨーロッパが中心となる。

地図を眺めていると、最果ての岬、行き止まりの谷、孤島など、演歌によく出て来るところが何となく気持を引き付ける。人が住んでいるだろうか、どうやって暮らしを立てているのかしら、交通の便はどうかしら等々、行ってこの目で確かめたいくなる。

スカンジナビヤ半島ノルウェーの最北端からフェリーでさらに1時間ほど北上するとマゲレヤという小島

に着く。その島の北端は北極海に向かって断崖となって切り立っており、そこが北緯71度10分のノールカップこと北の岬である。ヨーロッパ最北の地としてつとに有名であるが、アクセスに時間がかかり、行った人には滅多にお目にかからない。一度行ってみたいと思い始めてから30年余、幾たび地図を眺めてあれこれ情景を思い描いたことか。

それが2年前ついに現実となった。ノルウェーのトロンヘイムで国際会議が開かれ、付随の発電所見学ツアーのおまけとしてノールカップ訪問が含まれたのである。それも6月、白夜の絶好の時期であった。

現実と想像のギャップは相当なものだった。ラップ人どトナカイが住む不毛の土地は、実は可憐な花が咲き乱れる一面緑の丘陵であり、苛酷なはずの気候も、半袖シャツが丁度良い爽やかな初夏だった。うら寂れているはずの小島の漁港では、漁師達がのんびり日向ぼっこをしながら「日本が沢山魚を買ってくれて景気が良い」と上機嫌だった。……

緑の繁殖力と人間の生活力は、想像をはるかに超えて逞しい。最果ての地を求めての地図旅行の幻想は、現実世界の逞しさに負けてしまうことが多い。

\*\*\*

地図はもともと実際に役立つよう作られたものである。見知らぬ町に住所だけを頼りに知人を尋ねるとき、予め地図をじっくり眺め、主要な道路、建物を頭に入れる。日本の大都会ではこれはなかなか難しいが、欧米のように道路に沿って番地が規則的に並ぶところだったら、目的の道路にさえたどり着けばあとは簡単である。外国で初めての訪問地の玄関先にびたりと車を着けると、同乗している友人はどうしても最初の訪問とは信じてくれない。前もって穴の開くほど地図を眺めてきたことを知らなければ、驚くのも無理はない。

私には胎内羅針盤が組み込まれていると思うことがある。一方通行などの関係で遠回りを強いられるときでも、角を何回まわっても方向と位置を失うことは希である。陽の当たる方向、周囲の風景なども判断に役立てているらしいが、それよりも頭の中に無意識に地図を描いてそこに現在位置をマークする能力が自然に備わったらしい。

今の夢は、シルクロードを経てヨーロッパとアメリカ大陸を横断して戻って来ることである。この大旅行を地図で研究するだけでも暇つぶしの種は尽きない。